

習得之所々ニ竈ヲ置リ、此炭自然ト香甚美ニシテ、火氣強ク和也。因テ茶爐ニ置リ、竈本ニ撰除ヲ折炭ト號沽市也。

同榘炭カクヒス 同郡同所ノ山林並ニ豊島郡池田東山村ノ山家、歷木ノ根ヲ掘採テ竈ニ燒能火ヲ持コト久シ。

〔國産考〕攝州池田の在にてはくぬぎの木を何本とて嫁すに持參に遣すよし、此くぬぎの木といへるは野山に生立て、元の廻り一トか、へ、又一トか、へ、半もありて、壹丈ほどの上より、數百本枝出たり、此枝といへるは、元株より出たるは、廻り五寸より壹尺位になりたるを、冬に伐はらひ炭に燒出すに、池田炭とて世間茶の湯に用ふる也、是は伐て二三年も立ぬれば、又元のごとく七八寸あるひは五寸廻りぐらゐなる枝になる也、かくのごとくして數年伐とる事なれば、元株は右云ごとく二圍にもなり居る也、是も池田炭とて一種の名産也、尤右いふ古株より出たる枝にて燒たる炭なれば、程よくかるくして火もち宜し、三年目ヅ、間おき伐ても、壹株より七八十俵の炭を燒出せば、壹株銀貳匁ヅ、と見ても、八十俵にては百六十目也、半分雜用と見ても八九十目の利分也、十株あれば八九百目也、是を三年目に伐取と見れば、一ケ年凡三百目ヅ、の得分にあたるなり。

〔豆州志稿七土産〕炭 天城山及諸山ニテ製造ス、最良ナル者ハ熊野炭ニ匹ス可シ。

〔續江戸砂子一〕近國の土産大概

八王子炭武州

〔嬉遊笑覽七行遊〕安永二年巳二月頃、新大橋際三俣埋立地できぬ、其頃伊豆天城山にて始て炭を燒同國二科一色村文右衛門と云もの、連上金を差出し、此事を營む、炭を上中下に別ち賣に、下の分は粉碎けたるこな炭にて、蛤粉を燒に用しが、此時中洲を埋め築く者ども王夫して、これを買埋